
紅の大地～The Endless Red Earth～

ライオンソウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紅の大地～The Endless Red Earth～

【Zコード】

Z5530A

【作者名】

ライオンソウル

【あらすじ】

今の時代から数千年後の世界、人間は地球で異常気象、OCMの来襲など様々な危機に瀕していた人々は、火星に移住していく、、、

FILE1・プロローグ

？？？男A「シット！！しつこい奴らだな！」

？？？女A「全く、これだからあんたは、、、だから先に全員倒し

あまがさにていかたじ

弾仕掛けただろ！！」

「男田 ほんまにまたきましたよ」

野ヤ「ハサカー!!死神様の分通り」

紅の大地 The Endless Red Earth

地球は幾度なる異常気象、人口の増加、OCM等の来襲により地球は人間が住むには厳しすぎる環境になつていて。そこで人間は月、火星、木星に移住する計画を立てる。

火星歴01年

人類が月、火星に移住し始める。

既に人口はOCMの攻撃により世界人口は1／10以下になつていたため一部の貧困層を除きほぼ全ての人間が10年足らずで月、火星、木星へと移住する。

地球を追い出される形で宇宙に出た人類であつたが宇宙に出たことで収穫もあつた。

火星の鉱山で発見された鉱石「スタイルクリスタル（通称SK）」によつて生命属性と言う物が発見された。

この鉱物は人が触ると人体に吸収され、その人の潜在的な力を引出す力を持つており大小様々な大きさ、色がある。

基本的に大きく純度の高い物が吸収されたときに強い力が出せるようになつており、

そのような大きく純度の高いSKは通称キングやナイト、クイーン、ビショップなどと呼ばれている。

また、基本的に人体にSKは一度しか吸収されない。

さらには人間は宇宙開発時の技術の応用により汎用型生活補助（又は

戦闘用）ロボット

「ジェネラル アームズ」
が開発さ
れる。

主に「General Arms」は頭文字を取り「ガル」と呼ば
れる。

人間は地球から移住して100年たった今もOCMとの戦いが続い
ていた
そして100年と言う節目にあるプロジェクトが始動しようとして
いた、
、
、
、

「一週間前 火星 Star Link Bridge Heavy Industries（以下スリーブハイ）特殊工作部隊支部
にて」

男A「おーい、仕事が入ったぞ。工業プラントの破壊だ」

俺はアレックス アレックス・レイダー（22） 生命属性 炎
自分で言うのもなんだが超一流のランナー兼ブレイカーだ
ちなみにランナーって言うのは惑星間航海戦艦やガルを操縦するや
つのことと言う

ブレイカーってのは上の奴らに依頼された物を壊す、または奪還を

仕事とする奴らだ、早い話が特殊部隊

で何で俺達がこんなぼろ屋にいるかというと、 、 オレが社長と喧嘩したからだ

本部のブラックリストに載つちまつた俺達は資金面が毎月かなり寂しい

しかしへミッションは軍からこっちに来てからはほぼ全ての作戦を成功させているため

実力は認められてるらしく何とかだけは首は免れています

あと何故かオレはSKを取つていらないのに能力が使える。

才能だろうか？ だとしたら俺って天才？ イヤー流石オレ！ ！

女A 「またそんな仕事？」

こいつはレーナ レーナ・ヒュー・ポクライテ（21）生命属性 雷
一応俺の相棒だが料理は下手くそ がざつでかなり気が強く女らしいところはゼロ、 、 、

と言いたい所だが体つきだけはモデル並み、 、 、 うん、 こいつはそれ位しかない

仲間の中では一番弾薬費がかさむのが難点がある意味完璧主義で狙つた物は完璧に破壊しないと気が済まないらしい

まあ、 そのせいで仲間にまで雷が飛んでくるのはどうかと思うがああそうそう確かにいつもSKを取つていらないのに力が使えるらしい。 いつたいどうなつてんだか。

アレックス 「当たり前だろ？ それが俺達の仕事なんだから」

仕方が無いいつも似たような仕事だ

レイナ 「もつと楽な仕事無いの～？」

正直、俺も疲れていた

男B 「樂して稼げるほど世間は甘くはないですよ？」

この人ははソウメイ ソウメイ・ブレット・レイザム（31）生命属性 風

ジジイはたしか昔地球にあつた日本とか言う国の人間の末裔らしい見た目はかなり細く見えるが何かの武道の心得があるらしくコンビニでいかつい奴らに囮まれたときも敵はパンチ一発出す前にみんなのされていた、、、

ホント人間じやあ無いんじやないかと思うことがあるがこの中で一番の良識人であり物知りだ

そのおかげでそんなに老けてないのにみんな（一人をのぞく）から「ジジイ」と呼ばれている

あつそうそう、ちなみにリーダーだ

女B 「そうですよ、こんな世の中なんですから。あつお茶が入りましたよ?どうぞ」

彼女はアリス アリス・トゥルース（19）生命属性 水

これほどかわいいと言つ言葉が似合う人はそうはないんだろうはつ何言つてんだ俺！

かつ彼女はおそらく俺の知つてる中で一番女性らしい女性だろうまあ身近に女らしくない女がいればさらにそれが引き立つのだろうがちなみに彼女はこここの支部の人間ではない。実は彼女は本部のかなりエリートの部類に入り

階級もじじいの一個上の大尉だ。

何故そんな偉い人がここにいるかといつと「みなさん面白いですか」だそうだ。

本部の方の社長も友達の様な関係らしいので簡単にこつちに来れた

らしき

さらに彼女はビショップレベルのSKを取つたので生命属性「水」の発展系である「氷」まで使える。

エリーートの名は伊達ではないと言つことか

レイナ「あつ、ありがとう」

レイナは同じ女性だからだろうか？やたらアリスには優しいとゆうかアリスでなくても同じ女性には優しいが
男に対しては、

レイナ「ほらジジイにアレックス、アリスがお茶入れてくれたわよ。
さつせと取りなさいノロマ！」

こんな感じだ

ソウメイ「はいはい、有り難うござります大尉」^{ハラシ}

相変わらず笑顔が爽やかだ

アレックス「ありがとよ、アリス」

ソウメイ「ほらほら、大尉にはちゃんと敬語を使いなさい？ ろくな大人になりませんよ？」

アレックス＆レイナ「つるせいーー！」

ソウメイ「おやおや、2人の息がピッタリですねえ」

アレックス＆レイナ「誰がこいつ。あんたなんかとーー！」

あ

」

ソウメイ「ははは、それは夫婦漫才のつもりですか？」

レイナ「クッソージジイめー」

アレックス「アリスも何か言つてくれない？」

ソウメイ「すぐ人に頼つては行けませんよ？」

アリス「ふふふ、いいですよ。それとソウメイさんもどうか私のことをアリスと呼んでください」

ソウメイ「いえ、いくら何でも悪いですよ」

アリス「じゃあ上官命令です、私を大尉ではなくアリスと呼びなさい。」

ソウメイ「ふつ、解りましたよ　た　い　い　」

アリス「もう、ソウメイさんつたら」

俺達はまだ知らなかつた・・・

このいつもと変わらないと思つていた作戦が
俺達の人生の終わりで始まりだつたなんて・・・

続く

FILE1：プロローグ（後書き）

どうも作者のライオンソウルです。

紅の大地 The Endless Red Earth FILM
E-1プロローグはどうでしたか？えつまだ一章だけじゃまだ全然分
からない？まあ確かにそうですね。これからどんどん面白くして
いきたいと思いますが、まだまだつたないところがあるのでそこは
もつと精進していきたいです。

FIRE 2・1つの終わり、1つの始まり

いつもいつも似たり寄つたりの仕事

まあそれも仕方ないと思つよつになつてきた毎日

世界は相変わらず戦争が絶えない

だからこそ自分はこんな仕事に就けた

ある意味自分はこんな戦争に感謝しないといけないのかもしねい、
、それにしても

アリス「、、クス、ん、アレック、さん?アレックさん?作
戦時間ですよ?また寝てるんですか?」

眠い、、、それに、作戦時間つてまだ5時間後だぞ?

アリス「あーれーっくすさん?起きてこないんだつたら入ります
よー?」

時間に律儀なのは良いけど早すぎないか?それに今なんて、、、

アリス「じゃあ入りまー、、、」

ちょっと待て!…今部屋には俺の秘蔵コレクション(何かはあえて
言わない)

がたくさん転がって、、、しかもパンツ一丁だぞ！？
いろんな意味で誤解される可能性100%じゃないか！

アレックス「！！　ストップ！！　ストーリップ！！！」

ドン！

アリス「きやあ！」

アレックス「うわっ！」

ドシ――――ン！！

アリス「んつ、いたた　え？」

アレックス「イッテー　大丈夫か？　アリ　あ　（　）（　）

　　、　ボーン」

アリス「キヤ――――――――！」

アレックス「うわ――――――――！」

おちつけ！　落ち着け俺！！

ヤバイ　この体制はヤバイ

何がヤバイかつて言つたら体制がその　アリスの体に覆い被さるよう俺が、、、

アリス「キヤ――――――――！」

アレックス「わ————ギヤ————！」

何とかギヤとしても幸運、
じゃなくて実に不幸にも俺の上には開けたときに降ってきた荷物の
せいで動くことが出来ない。

早くじてあげないと変な誤解、
はもう生まれているか。
だつたらもうちょっとこのまま、
だつたらもうちょっとこのまま、

ダッダッダッダッダ

レイナ「どうしたの？ アリス！ ——
をしてるの？ あなた達！ ？」

アリス「助けて————！ ——アレックスさんが————！」

レイナ「アレックス！ ——あなたつ————！」

アレックス「ちちちちち違つ！ —— 誤解だ！ —— 俺は無罪だ————！」

「————！」

レイナ「言訳、 、 、 するな————！」

レイナの十八番ローリングソバット！ —— アレに当たつたら 死、

ゴシヤ！ ——

アレックス「で、何でそんなにジジイはテカテカしてんだよ

ソウメイ「いやー久々に良い物が見られました。」

アレックス「ホントに性格悪いよな、あんた。」

ソウメイ「でも、あの人のソバットを受けて生きていられるなんて
流石

『アブソリュート リヴ』
の異名を持つだけのことはありますね。」

アレックス「…………やめろ」

ソウメイ「えつ？」

アレックス「いや…………」

「

その話題はやめてくれないか

ソウメイ「、、、すみません。少し軽率でしたね。」

アレックス「…………」

ソウメイ「…………」

アレックス「はあ 何で俺は30過ぎのジジイに看病されたんだか、
「

ソウメイ「自分で招いたことでしょ? それともあんな騒動起こして
たあとで2人が看病してくれるとでも?」

アレックス「うう 確かに、 、 、 、 」

ソウメイ「それと、ひとつ忠告しておきまか」

アレックス「? なんだよ?」

ソウメイ「ちやんと隠す物は隠して置いた方がいいですよ?」

アレックス「! ! ! ! !」

ソウメイ「よし、終わりま」

アレックス「ななななななな何で! ?」

ソウメイ「ははは、誰でも解りますよ。それにしてもやつぱりみんなにばれて無いと思っていたんですね?」

アレックス「みんなにって、 、 、 まさか! ?」

ソウメイ「ええ、みなさん知っていますよ」

終わつた、

この瞬間自分が積み上げてきた物が音を立てて崩れ去っていくのが

解説

みなさん、自分は一足早く先に行つて参ります、、、

નુદી

ソウメイ「やれやれ、氣絶してしまつとは案外メンタル面で弱いみたいですね。

、 、 、 それにして もあの蹴りを受けて脳震盪と打撲で済んだのですか。

۹۷

さすがはXナンバーと言つたところですか、

L

カツカツカツカツカ

アリス「あつソウメイさん。次のミッショソンまであと4時間になつたので最終確認兼、移動しますよ?」

ソウメイ「分かりましたすぐに行きましょう」

アリス「・・・ところでアレックスさんは何処ですか?」

ソウメイ「そこでのびていますよ」

アリス「そうですか、、、じゃあ起きてもらいましょうか・・・でやつ!」

『ソリットウォーター!!!』

そう言うと彼女の手から出た水が弾丸の「とくアレックスに襲いかつた。

（同時刻 第4工業プラント）

「今はまだ目の前に全人類の敵が居るのだぞ!?」

「今はそれよりも人間同士の戦いを止めなくてはなりません」

「しかし、まだ地球には人間が地獄のような暮らしをしているんだ

彼らを助けたいと思わないのか！？」

？？？「いいえ、彼等を助ける前に私たちのプロジェクトと貴方の「機体」は必要です」「

？？？「その「機体」は大量殺戮に使つてはいけない！！私はあくまで対〇〇用に作った物だ！！」

？？？「どちらにしても同じ、戦いを終わらせるために作ったことは違います」

？？？「同じではない！！　どうしてそれが分からない！？」

？？？「分かりません」

？？？「くつ、もういい！　どちらにせよお前らにはあの機体を操れない」

？？？「なんですか？」

？？？「私がそのようにプログラムしておいた。絶対にお前らには動かさせはせんぞ」

？？？「くつ

？？？「そう言つ事だ。お前らは地球人を助ける」とプロジェクトを進めていく。「

カツカツカツカツカツカツ

？？？「ふん・・・まあ良いわ。」

ピ

？？？「私よ、予定通り4時間後に作戦を実行するわよ、
ふふ、
まだあの博士には利用価値は有るわ
まだ殺さしちゃダメよ。『大義は我らにあり』ふふふふ、

続く

FILE3→ 実行 ミッションスタート

アレックス「鬱だもう生きていけない・・・」

レイナ「まだ22なんでしょう？ なにジジイみたいな」と言つてんのよ」

アレックス「・・・」

レイナ「どうしたのよ？ 反論する元気もないの？」

ソウメイ「そこ、作戦はちゃんと聞きなさい。」

アレックス「・・・」

アリス「もう、ちゃんと聞いてください。」

ソウメイ「仕方がないですね。では大尉、説明を続けてくれますか？」

アリス「わかりました。今回は潜入ミッションです。目標は第四プラントにあるコンテナになります。」

レイナ「はいはいはーい！」

アリス「はい、なんですか？」

レイナ「そのコンテナの中は何が入ってるの？」

アリス「中身は、、、カプセルのようですね。」

レイナ「それだけ?」

アリス「はい、それ以上はなにも書いてません……」

ソウメイ「訳ありのようですね。」

アレックス「……面白そうじやん。」

レイナ「ええ、なかなか刺激的じやない?」

アリス「では、作戦の続きです……」

（3時間後 第4プラント前の森にて）

アレックス「で、何でオレが外で待機なんだよ?」

ソウメイ（通信）「今の貴方は来ても邪魔になるだけです。」

アレックス「うつ、何処に行つてもオレは厄介者か、、、」

ソウメイ（通信）「まあまあそんなに悲観的にならないでくださいよ?（ニコッ）それとも誰かおいていった方がよかつたですか?」

アレックス「それはやめてくれ!今の状態でレイナをおいて行かれたら何やられるか分かったもんじやないし。アリスは、、、アリ

スにはどんな顔をすればいいかわかんねえ。」

ソウメイ（通信）「それなりに反省しているみたいですね。」

アレックス「さつき少しでも変な気持ちになってしまったのもあるからな、ははは・・・はあ。」

レイナ（通信）「ずっとぶんないじょうね。」

アリス（通信）「アレックスさん・・・さつき私の体でそんなこと考えていたんですか？」

アレックス「え？ もしかして、、、ジジイ！ あんた！？」

ソウメイ（通信）「なんですか？」

アレックス「通信をみんなにまわしてたな！？」

ソウメイ（通信）「ええもちろん（テカテカ）通信は普通、みんなにまわす物ですから（＝口ッ）」

レイナ（通信）「何が何をされるか分からぬよつー？ 普通そんな事レディーに言つー？」

アリス（通信）「アレックスさんがそんな人だったなんて、、、」

アレックス「わーーー！ 違うつー！ それにお前みたいなのはレディーなんていわねえ！」

アリス（通信）「ひどいっ！ そんなこと言つ人だったなんて！」

アレックス「ちちりけ違つ……今までアリスに言つたごじやなくて・・・」

「・・・」

レイナ（通信）「じやあ誰に言つたのよー?」

アレックス「お前しかいないだろーがー!」

レイナ（通信）「なつー、あなた、後で覚えておきなさいよー?」

ソウメイ（通信）「みなさと少し静かにしてください。」

レイナ（通信）「止めないでよー、ジジイー!」

ソウメイ（通信）「静かにしてください。さつきから人が少なすぎると想いませんか?」

レイナ（通信）「や、そういえば確かに」

アリス（通信）「麗、でしようか?」

ソウメイ（通信）「いえ、硝煙の臭いとこれは……血?」

レイナ（通信）「?なんの臭いもしないわよ?」

ソウメイ（通信）「私の能力を使わないと分からぬほど微かな臭いですか?」

「・・・」

アリス（通信）「硝煙つてまさか?」

アレックス「……ああ、どうやら先客がいたみたいだぜ？」ひらでガルを5、いや6体確認した。

ソウメイ（通信）「ではそちらは任せました。本当のところ一人で戦つた方が色々楽なんでしょう？」

アレックス「……ああ、だけどあいつ等の様子を見ると既に本隊は潜入しているみたいだな。ハツ、つまりあいつ等も留守番か。」

ソウメイ（通信）「ええ、そちらを片づけたらこちらに来てください。」

アレックス「結局行くのかよ。まあいいか、まずは目の前の敵に集中集中つとお！」

レイナ（通信）「後で会つときはおぼ ブチッ」

アレックス「さあー！オレの巻き添えはだれだあ！？」

今まで静を保っていたそれが、一瞬で加速する

敵はただの無謀なガルだと思っていた。

一発、二発、アレックスはライフルを撃つ その間にガルが3体破壊される ～2秒～

敵が応戦する。しかし、アレックスには当たらない ～4秒～

ビームナイフでガルのコクピットのみを貫く 残り2体 ～7秒
また敵が無駄な弾を撃つ、アレックスの炎がそれを許さない ～9
秒

敵がアレックスの炎に包まれる。2体のガルが跡形もなくなる ～
11秒

アレックス「ふう、え～っとタイムは、～、11秒か。ん、惜しい
な。・・・なんだかんだ言つてまたオレ戦つてんだな。やつぱり
オレは戦うことしかできない無能な人間なのか。」

ただ無性に、本能の赴くまま戦う それだけ

自分では制御できない感情 そのせいで仲間を

アレックス「おつと、感傷に浸りすぎたが、ダメだなオレ。
さて、じゃあレイナ達を助けに行くかな」

ソウメイ「アレックスの言つたとおり先客がいたようですね」

アリス「ええ相当な数ですね」

レイナ「これくらいじゃ私は止められないわよ?」

ソウメイ「見つかってしまった以上逃げることもできない、か。」

レイナ「なかなか刺激的なシチュエーションじゃない?」

兵士「無駄口を叩いてるだけの余裕がお前等にあると思うのか?」

隊長「全員一構え!――」

・・・・・

隊長「撃て――――――!――」

・・・・・

隊長「撃て!――どうした!? 撃つ、、、な!?」

そこにはいたのは兵士ではなく、無数の氷像だけだった

アリス「すみません、ちょっとみなさんには凍つていただきました。」

「

隊長「お、お前スタイルリストか!?」（注）スタイルリスト=SKK
を取得した者のこと

レイナ「残念ながら、私たちみんなスタイルリストなの。」

隊長（ち、畜生！3対1じゃあ勝ち田がない。）「は逃げるか！」

隊長「食うえーーー！」

バンッ！バンッ！バンッ！

ソウメイ「スマートボムで私から逃げ切るとでも？。。。」「神風」

流れる風に乗り煙が消えてゆく

隊長「なつー？煙が？」

ソウメイ「プロは戦闘中も常に背後に気を付けないといけません。」

レイナ「いっただきー！」「ライトーングランサー！ーーー！」

バチバチッ！

隊長「のわあー　まさかお前等、ーーー」

ソウメイ「ええ。今は一人「死神」が足りませんが「紅き旋風隊」と言つたら私たちのことですよ。」

レイナ「その名前ださーからやだつて言つてゐるじゃない。」

アリス「いいじゃないですか、わかりやすくて。」

ソウメイ「まあ氣絶している人には聞こえませんか。アリス、カプセルは第何研究室ですか？」

アリス「資料によるとカプセルは第8研究室に有るようですね。」

レイナ「じゃあ第8研究室とやらにレシ ビーナー...」

アリス「お～～～！！」

ソウメイ「やれやれ」

続
く

FILE3→ 実行 ミッションスタート→（後書き）

懲りずにまだ公開していきたいと思います。

書いてて思うのですがやっぱりまだまだ修行が足りませんね。
これからもまだまだ続していくので、ながーい日で見てやってください（＾＾；）

FILE 4 はじける力

「えへっと、ここは何処だ？ 確か第四プラントに入つて・・・自分が何処にいるのかますますわからなくなってきたぞ？」超方向音痴のアレックスには地図無しで初めて来た所など歩けるはずもなかつた

「さて、基地内じゃトランシーバーも通じないしここはどうするか・・・第8研究所？ ん？ そう言えればアリスがさつき第8研究所とか何とか言つてたよな。行く当てもないし入つてみるか。」

久々の休みなのに子供につきあわされて遊園地に来たお父さんの如く、いかにもけだるそうな風貌でまた歩き始める。研究所のドアに近づく前に2人居たがアレックスにとつて2人程度黙らせるのは造作もないことだつたので省略

アレックスはドアに手を伸ばそつと思つたが ドアの奥からの音に気がつき

「おつと、先客がいたか。・・・何か言つてるな。ちょっと聞いてみるか。」

と言つと、ドアの先から典型的な盗み聞きのポーズをとつた

「ふふふ、さあどうしますか？ ウィル。」

軍服を着た男達の前にいる琥珀の目をした女はあえて解つてingoとを聞く。

「それで脅しているつもりか？ クライイン、何度も言つている筈だ、アレを動かせる人間なんて早々いない。ましてやお前のようならただの一研究員なんかに、・・・」

「ウィルと言われた男は当たり前の、しかし唯一の方法を結論から除外してしまつていた。」

「動かせます」

「何?」

「私も「披研体」ですから。それも「ナイト」のね
そう言うとクライインは僅かに男に近づく
「バカな!?」「ナイト」レベルは既に全大戦でほとんど消滅してい
るはずだ!?」

「ええ、本物はね。しかしそのデータから本物以上の「人工SK」
が出来たと聞いたらどうしますか?」

「ありえない!ナイトレベル以上のトレースは不可能だったはず
だ!!」

ウイルは認めたくない現実から、自分でも理解している事を必死で
反論していた

「いつの時代のことを言つているのかしら? 今ならボーンレベル
のSK程度なら量産できるわ。と言つてもアレの、「イヴォルヴ
メタル」の開発しかしていなかつた貴方は全く知らないでしょうね。」

「注) ボーンレベル= SKの一一番小さく純度の低い種類のこと

(披研体? レース? イヴォルヴメタル? 何だそりや?)
アレックスは色々と考えたがそっちの方面的知識はほとんどなかつ
たので
何のことか解らず、とりあえず記憶しておくだけにとじまらせてしま
った

「くつ、そんなたいそうな物の次は「イヴォルヴメタル」を奪いに
来た、と。」

「奪いに? 違うわ 元々アレは私たちのために開発されたような

物よ。」

クラインは近づき、さらに手には注射器が握られていた

「・・・・・」

自分でも分かつていて。気づきたくなかった。

自分は彼女に、良いように利用されていたのだと。

「後は貴方の後ろのカプセルを開けて、持っているプログラムを始動すれば全ておしまい。まあ私たちと手を組むのなら命だけは助けても良いけど？」

もちろんそんな事は嘘だと解っていた。しかしそれ以上の理由が彼を突き動かす

「お前らがやるうとしていることはだいたい解る。そんなバカなことに私が手を貸すとでも？」

何をして死ぬのなら最後まで自分の信念を貫きたい。

ただのかつこつけの様だけれどそれでも死に際くらいは潔くなりたい。

バカだと言われても良い。どうせ今までと同じ自己満足の人生だ。「貴方が簡単にYESと答えないとは分かつていてけど、、、しょうがないわね。やっぱりこの薬を使いましょうか。あなた達博士を押さえてちょうだい。」

そう言うと周りにいた男達がウィルの腕をつかんだ。

ウィルは力ではかなわない、もとい死ぬ覚悟だったので抵抗はしない。

アレックス（あの男、話を聞いたところカプセルのこと何か知つてみたいだな。色々聞きたいことも有るし、、、でも、ナイトクラスに勝てるか？あゝ考えてても仕方ねえ！！）
ならばと言わんばかりに、手に握られた銃に力が入る。

入った瞬間・・・撃つ！！

バシュン！！

静かな部屋に響く銃声

レールガンの軌道が男に重なる
レールガンの弾が一人の男に当たる

レールガンの弾に当たった男は

アレックスだつた

「ぐわっ！？」

一瞬何が起こつたか解らなかつた
まさか自分が撃たれるなんて思つてはいなかつた
幸い当たつた場所は腕、しかし出血が多い

「だれっ！？」

彼女も突然の銃声に驚く

「クライン、ネズミが一匹紛れ込んでいた。 相当な数がこいつに
やられている。」

「どうとドアの先からフェイスマスクを付けた銀色の髪の男が入り
込んできた

「見回りご苦労様。 口クサス。 こいつは、ヽヽヽ！」

口クサスと言われた男は頷きもせず、ただ膝をついている侵入者を見続けていた。

「ちつ、銃を撃つつもりがまさか撃たれるとはね。」

久しぶりに撃たれた感じを少し懐かしいと思いつつも、自分が戦いの場にいることを改めて痛感していた。

「久しぶりだな、アレックス、いやXナンバー」

「!? オレにはそんなマスクをした知り合いはいないぜ？ それにXナンバー？ 何だよそれ？ お前・・・なにもんだ？」

初めて会ったと思われる人にいきなり名前を言われ少し動搖しつつ、いつでも反撃出来るよう、撃たれていない左手に力を込めた

「顔が見えないからか？ フツ、恩人を忘れるとはお前らしい。」
久しぶりにあつた友人の様な口調でしゃべるのがアレックスは気に入らず

「ハツ！ じゃあオレを知っているのならもう少く、オレの強さも知ってるんだろう！？」

その刹那、アレックスの腕から紅蓮の炎が湧き出す
全てを燃やし尽くし 岩すら溶かすほどの炎は周りを取り囲んでいた兵士を燃やし尽くす

「猪突猛進ぶりは相変わらずか。ウイルが死んだらどうする？」

何もないはずの空間から幾数千ガロンもある水がウイル、クライン、ロクサスを包み込む

彼らが纏っている水にアレックスの炎がかき消されてしまう

「なつ！？ オレの炎が水なんかにかき消されただって？」
アレックスの全力の炎がかき消される事なんて一度たりともなかつた
それはSK使い、スタイルストとしての能力がロクサスと言う奴に負けていると言つことだった

「流石、アブソリュートリヴなかなかの火力だ。」

過去の呪いが込められたその名に憤怒したアレックスは
「オレを・・・オレをその名で呼ぶなあ！！」

さらに炎の力が増していく

「さすがXナンバーだな！しかし、このシチュエーション、あの
ときを思い出すぞ！！ 残念なことに今回はネリアはいないようだ
がな！！」

「！！！」

その名前には聞き覚えがあった。

おそらく一生忘れることの出来ない名前だろう。

自分のせいで、自分が無力だったせいで助けられなかつた大切な人

「お前ツ！！お前ツッ！！！ お前-----！」

かえられない自分の罪

忘れていたわけではない。

しかし、「コロシタノハジブンダ」

理屈では解つても悲しさと怒りがあふれ出る
この怒りは仮面の男に対してではない、

大切な人一人守ることが出来なかつた自分の無力さにたいしての怒
りがあふれてくる。

彼の手に水が収束していき、アレックスとは比べ物にならない程の
力が収束し
力が、水がアレックスに向けて放出されていく。激流のような水流
はアレックスを吹き飛ばす

「くそつ！けつ消せない！？うつうわ-----！」

凡人なら一瞬で肉塊になる程の水圧が一斉に襲いかかる
(く、くそオレじゃあ 勝てないのか？ 息が・・・ヤバイ意識が
遠くなつて、、、いく、、、)

ドサツ・・・

「死んだの？」

今まで後ろにいたクラインが前に出てくる

「いや、気絶しているだけだ。これがXナンバーって奴か」

「ええ、でも覚醒していないみたいね、使えない。ふふ、でもまさか披研体の方から来てくれるなんてね。」

「そつちはどうなつた？」

「あの人は薬を打つたらまじめに働いてくれたわ。」

「違う、カプセルの中身のことだ。」

問題は結果だ、結果に至るまでのプロセスは意味をなさない

「開いたわ。中身はやっぱりXナンバー0ね。」

「こいつが・・・」

そこにいたのは十代前半と思える幼い少女だった。
すぐに溶けてしまうような氷のような儂さや弱さ、しかし透き通る
ような美しさも持った少女は

カプセルから出たとたんまた眠りについてしまった

「ならオレはこいつを持って先に格納庫に行つてる。アレックス
は殺すなよ。」

「さあ？どうしましようか？」

ロクサスは返事をする前に部屋から出でていった

「戦いの時以外は感情を出せないのね、まあ私の命令にだけ従つてくれていればいいわ。」

他人を使えるか使えないかとしか見ることの出来ない無能な有能は、
余った時間で自分の作った計画を何度も確認し、計画が完璧に・・・

アレックスが来たことは予想外だつたがそれを含めても順調に進んでる事に一人嘲笑していた。

「ちょっと待つて?」いつが来たとは仲間もどこかにいると言つこと?

これだけの施設に一人で入り込んでくるとは考えづらい。それを含めても作戦の大きな変更はないが

「ボーン」

「プログラムが始動しました」

あれこれ考えていくうちにプログラムが起動したようだ

「さて、プログラムも起動したしもう貴方は用済みね。」

彼女の手には先ほどの注射ではなくハンドガンが握られていた

「さよなら」

彼女がトリガーを引いたとした瞬間

「おーおー、まてよ。まだ俺が遊んでないぜ?」

「フッ、そう言えばアレックスと呼ぶたかしら。まだ貴方がいたのね。」

そこに立っていたのは先ほどの戦闘で傷ついたアレックスだったとしても立てるような傷ではないはずなのにあつせりと、当たり前のようにそこに立っていた

「そいつにもお前にも聞きたいことがあるんだけど俺の、いやこいつのために答えてくれるか?」

一步近づく

「あら残念、彼はもう邪魔だから殺させてもらひつわ。」

「じゃあお前を止めるか。愚民、あまりオレを怒らせるなよ？」

さらに一歩近づく

「死にかけの貴方が私を止められるの？」

クラインの銃に風のエナジーが集まる

「SKエナジー、バスター・モード」

殺すなと言われたが覚醒していないXナンバーなんて使えないなら「ミは早いうちに消しておいた方がいい。

「私達に報いた罰よ、消え去りなさい。」カチッ

4口径の銃から出てきたのはただの弾丸ではなく戦艦の主砲レベルの光線

そして光線は研究室を破壊していく カプセル コンピューター・

・

全てが消えてゆく

まずこれを受けて生きているわけがない

はずだった

「ふう、少しやりすぎたわね。私も格納庫にいきま、ヽヽヽ！」

彼女は感じた。いるはずのない人間の気配を

「アハハハハハハ！！ ナイトレベルってのはその程度か！？」

「え？」

彼女が撃つた銃には口クサスが出した水エナジーの数倍の力を込めたはずだった。

「なつ何なのよ！？ どうしてそこにー？！」

しかもさっきの光線を書き消したと言うことはそれ以上の力を出したと言うことだ、なのにその力の解放を感じることが出来なかつた。

普通そんな力を出した場合は簡単に感じることが出来るはずなのだが・・・

「アレックスに死なれたら、俺が困るんでね。」

「な、何を言つてゐるよ。無駄なはつたりはよしてちょうどだい！」
様子が何だかおかしい、さつきとはまるで別人になってしまつてゐる。

アレックスつてこいつの名前ではなかつたの？

「はつたりがどうかはすぐ分かるぜ？」

「つ！ 消えなさい！！」

続けて3発、4発、5発撃つ

しかし、全ての光線がロクサスとウィルの所だけ避けていつてしまふ。

「愚民が、絶対的な力の差が分らないのか？ 所詮ただの兵士は王には勝てないって事だ！！」

分からぬ。

どうしても何も感じられない。

むしろさつきの炎を出していた時の方が強い力を感じた。

今は力の存在すら感じられない。これじやSKを取つていない人間以下だ。

それに「兵士は王には勝てない」？ それではまるで

「まさか・・・？ お前が、・・・？ そんな！ あり得ない！」

そう言つうと彼女は先ほどとは比べられない程の力を銃に込める。
研究所が半分吹き飛ぶかもしれないがこのわけが分からぬ奴を早く消してしまいたい。

「今度こそ！！！ 本当に死にな・・・」 ドスツ

「つむせえよ、こいつの仲間が死んじまつだろ？」

「――――！」

クラインの体はアレックスの姿をした何かの腕に貫かれていた
「大丈夫だ、すぐに死にやしない。死んだら話が聞けないもんなあ
？」

「が、、、はあ」

何とか息は出来る。質問に答えさせるためだろう。しかし、出血量
が多すぎて頭が回らない。

「まず一つ目の質問。えーっと？ああそつそつ。あのロクサスとい
う男はどうしてこんな所にいるんだ？」

まるで誰かに言われた質問を聞くようにしゃべっていく

「私の、、、部下だもの。ここにこるのは当たり前でしょ、、、？」

「ちつ、まあ良い。二つ目の質問。カプセルの中身は何だ？」

「・・・」

「三つ目 トレースとは？」

「・・・」

「四つ目 イヴォルグメタルとは？」

「・・・」

「五つ目 披研体とは？」

「・・・そんな何でも言つと思つた？」

「ふん、お前に聞けるのはここまでか。最後ぐらい王の役に立て
ばいい物を・・・」

彼のプレッシャーが変わった。今まで何も感じられなかつた筈な
にいきなり殺氣がわく。

それも純粹な殺氣だけ、他は相変わらず何も感じられない。

「じゃあな 愚民」

続く

FILE5～合流～

その女性はどこまでも続くかとも思える無機質な道を走っていた

カツカツカツカツカツカ

「はあ、はあ、はあ、はあ、はあ・・・・・」

広い

広すぎる

「もう、こんなことならアリスがジジイにしつかり聞いておくんだ
つたわ。」

今更の事に軽い自己嫌悪を抱いたが

(どうせ今度も聞かないんだろうな)

やつぱり反省はしていなかつた

「とにかく、早く行かないと・・・・・」

不覚にも敵の陽動に引っかかつてしまい、(実際は考えずに一人突
つ走つた結果だが)

はぐれてしまつた彼女は、先ほどの大きな力の元に向かう事にした。
おそらくアリスもジジイも向かうところは同じだろう

「あんな大きな力・・・いつたいどんなサイズのSKをとつたのか
しら?」

当然の疑問

ルークSKをとつたアリスでさえあんな力は出せない
じゃあ誰が?アレックスではないことは確かだが・・・

「あ~っ、もう!考えるのはヤメヤメ、行けば分かる!」
もともと考えるタイプではなかつた彼女は、

脳を働かせることより足を動かすことになった。

「ん、見えた！ あそこは・・・第八研究所！」

そう言うと彼女は坦いでいたレールキャノンを構えた

「じゃあな、愚民」

「どうする？ 考えろ、考へろ、考へろ！！
まずこいつに勝つのは無理だ
なら逃げろ、でもどうやって？
自分の体はこの化け物の腕に貫かれている

「 しかし、せつかくだ、もつと俺の力を見てから避け
「それは、、、楽しみね」

普通なら時間を稼ぎたいところだが
出血の激しさからそもそもいかないようだった
(少なくともこの手を離せれば逃げられるはずよ・・・)
そんなことを考えていると、人の足跡が聞こえてくる
やがて足跡は止まり、今度は大きな電子音が聞こえてきた

「ふん、来たか」

「？」

アレックスの見る方向でレールキャノンの発射音とともにドアが粉砕する

「残念だがここまでのようだ。下手に俺が力を使ってあいつに死なれても困るのでな」

そう言うとアレックスは糸の切れた人形のように倒れこむ。その後2～3秒後ドアの外から突っ込んできたのは

「アレックス！！ 大丈夫！？」

レイナだった。

「化け物の次は増援？ ついてないわね・・・」

「ア、アレックス・・・まさか、あなたがやったの！？」
もはやレイナは傷ついたアレックスしか見えていなかつたとえ、下腹部に大きな穴の開いた人間が居ようとも

「あなた、私たちの仲間に何をしたの？」

「・・・」

「ねえ、答えて や、答える」

おそらく彼女からも殺氣が出ているのだろうが、化け物の殺氣のせいだ感覚が麻痺しているため、実際はわからない

「ありがとう」

「え？」

「あなたのおかげでこの化け物の手を離せたわ。」

「化け物？ ふざけないで！」

「フフ、まああなたもこの化け物に殺されないようにな？」

そう言うと彼女から暴風が巻き上がった

「！！ くつ待て！」

彼女が叫んだ時はすでに消え去つた後だった

「・・・もう居ないか。 そうだ！ アレックス！！」

どうやら息はしている ただ、体の損傷が激しい

「アレックス！？ アレックス！？」

「・・・ロクサス」

「え？」

「ロクサスはどこだ？」

起きて初めに呼ばれた名前が自分ではないことに腹が立つたが

「今ここに居るのは私とアレックスだけよ

「逃げられたか・・・うう」

「大丈夫？」

「このくらいならいつものことださう？それよりそこにおっさんが居ないか？」

アレックスが指を指したその先には少しこげた白衣の中年が倒れて
居た

「もしそいつが死んでなかつたら詳しい話はそいつに聞いてくれ

俺は・・・寝る

「ちょ、ちょっとまだ寝ないでよアレ

ス ア

」

レイナが何か言っていたが、アレックスの耳には聞こえない
そして、アレックスは心地よい闇に身を落としていった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530a/>

紅の大地～The Endless Red Earth～

2010年12月31日00時48分発行